

九州の縄文時代の二つの耳飾り

—九州の塊状耳飾と耳栓について—

新東晃一

Two types of ear ornaments from the jomon period in Kyushu

Shinto Koichi

要旨

九州の縄文時代には、塊状耳飾と耳栓の二つの耳飾りが存在する。切り目を持つ塊状耳飾は、耳たぶに孔を穿ち、そこに挿入してぶら下げるもので、石製が多い。耳栓は、耳たぶに孔を穿ち、そこに嵌め込むタイプで、土製が多いが、上野原遺跡等石製品もある。これまで、塊状耳飾はアカホヤ火山灰の上位から出土するのが一般的であったが、近年、鹿児島県や宮崎県、熊本県などでアカホヤ火山灰下位に出土するタイプが4例確認できた。アカホヤ火山灰下位の塊状耳飾の形態を把握し、これまで採集されている九州島内の塊状耳飾を検討してみたい。さらに、耳栓については、これまで九州では、南九州のアカホヤ火山灰下位から出土するものがほとんどであったが、福岡県や佐賀県では前期以降で後期、晩期の段階のものも存在するようである。最後に、九州内出土の塊状耳飾と耳栓の関係についても検討したい。

キーワード 塊状耳飾 耳栓型耳飾 アカホヤ火山灰下位

1 はじめに

縄文人が好んで用いた装身具の一つに、耳飾りがある。この縄文時代の耳飾りには、「塊状耳飾」等と呼ばれる主に石製の耳飾りと、「耳栓」・「滑車形耳飾」・「透かし彫り形耳飾」等と呼ばれ主に土製の耳飾りの、大きく二種類が存在する。これらはいずれも、東日本に発見される土偶の中の装着例や、今なお世界各地に残る民族例からみて、耳たぶに孔を穿け、そこに嵌め込んで装着する耳飾りと想定されている（設楽 1983, 原田 1988）。

なお、縄文時代の二つの耳飾りのうち、石製の「塊状耳飾」は、中部・北陸地方に早期の終わり頃に出現し、前期に盛行し、中期以降には作られなくなったといわれている。土製の「耳栓」は、東日本を中心に中期中葉頃に登場するもので、中央がややくびれた鼓状の土製品である。その後、「耳栓」の大型化・装飾化によって出現した「滑車形耳飾」は、縄文時代中期中葉以降、「耳栓」の中間的形態を経て後期から晩期に盛行すると考えられている。

これまで、九州島内にみられる塊状耳飾と耳栓等のいわゆる縄文時代の二つの耳飾りは、いずれも、中部・北陸地方あるいは関東地方の耳飾り文化が伝播したものとの考え方が一般的であった。

ところが、南九州で塊状耳飾がアカホヤ火山灰の下位から出土したことによって、塊状耳飾の初源期の形態的位置づけ（編年）が明確になった。さらに、南九州における耳栓等のアカホヤ火山灰下位の出土は、日本列島で

は考えられない事象であり、日本の縄文文化観の転換に迫る成果を提供している。また、九州島内の耳栓は、北部と南部では日本列島の在り方と同じ事象が見られるようである。

ここでは、この二つの耳飾りについて、課題を整理し、検討してみたい。

2 二つの耳飾りの研究小史

九州で見られる二つの耳飾りのうち、塊状耳飾については、1981年に上田耕によって注目されて、「九州における塊状耳飾について」でまとめられている（上田 1981）。この段階で、福岡県4遺跡、佐賀県1遺跡、長崎県2遺跡、熊本県7遺跡、大分県4遺跡、鹿児島県13遺跡の九州内の総数31遺跡を数えている（上田 1981・水ノ江 1992）。

もう一つの耳栓については、1993年の筆者の「縄文時代の二つの耳飾り」の中で、南九州に見られるアカホヤ火山灰下位出土の耳栓について論じている（新東 1993）。この時点では熊本県1遺跡（2個）、鹿児島県2遺跡（3個）の3遺跡5個がと数少ない報告ではあるが、南九州には間違いなくアカホヤ火山灰下位に耳栓が出土していることを報告している。この段階での塊状耳飾は、アカホヤ火山灰上位からの出土であり、まだアカホヤ火山灰下位の出土例は知られていなかった。

「塊状耳飾」は、平面形が古代中国の玉器「玦」に似ていることから付けられた名称で、縄文時代早期末頃、

まず中部・北陸地方に出現し、前期後半にはその分布を関東・東北地方、さらに近畿・九州地方に拡大したとされている。「玦状耳飾」の素材は、加工が容易でしかも美しい光沢をもつ滑石や流紋岩などが使用されている。中部・北陸地方には玦状耳飾の多くの原石や未製品が出土する製作遺跡が点在するところからそこで生産され、遠く離れた地域へ交易品として伝播したと考えられている。神奈川県上浜田遺跡や大阪府国府遺跡等で墓壙のなかの遺体の頭部位置から二個一対の「玦状耳飾」が出土しており、埋葬された遺体の両耳に装着されていたことは確認されている。そして、「玦状耳飾」は、中央の円孔が大きく、正円形に近いものが早期で、前期に入ると次第に中央孔が小さくなり、下方の切り込みも外線から中央孔に向けて垂直に擦り切る縦切りから扁平に細長い切り込みを入れる横切りへと変化して、全形も下方が長く伸びた縦長形へ変わるとされている。

「玦状耳飾」が縄文時代前期に流行したあと、中期中葉頃には東日本を中心に「耳栓」が登場すると考えられている。「耳栓」は「玦状耳飾」とは、その出現時期に隔たりがあることや両者の形態上の違いからまったく別系統の装身具と考えられている。「滑車形耳飾」は、「耳栓」の大型化や装飾化によって出現したもので同種のものと考えられている。縄文時代中期中葉以降の「耳栓」との中間的なものから、後期後半には中心部に様々な文様を施した精巧な幾何学文を飾るものが多くなる。そして、大型で精巧な彫刻文様で飾られた「透し彫り形耳飾」へと発展していくとされている。この時期、関東地方に多い「みみずく形土偶」にしばしばこの耳飾りを付けた状態を示すものがあり、縄文人の間にかかなり普及していた耳飾りとされている（設楽 1983, 原田 1988）。

九州の「玦状耳飾」は、戦後幾つかの報告例はみられるが研究の歴史は浅く、1969年、前川威洋によって西日本の縄文時代の耳飾りをまとめ考察されたのが最初にあげられる（前川 1969）。それによると九州を含め西日本の「玦状耳飾」は東日本の展開とほぼ同じく縄文前期に盛行することが指摘されている。

その後、1981年、上田耕によって九州出土の17遺跡28個の「玦状耳飾」を対象に、編年・起源・形態・素材・使用方法等の考察が行われ、九州の「玦状耳飾」の性格付けを精力的に進めた（上田 1981）。その結果、九州の「玦状耳飾」は、その多くが縄文時代前期の轟式土器に伴うことを指摘している。そして、九州以東に古いものが存在することから、一応国内で自生したものが九州島へ伝わったとしている。

そして、1992年、水ノ江和同は九州の「玦状耳飾」についての研究の現状を整理し、それまでの「玦状耳飾」の研究史から九州地域のあり方を考察し、今後の研究の方向性を展開している（水ノ江 1992）。現在のところ、

九州の「玦状耳飾」の研究の総決算ともいえる力作である。それによると九州では32遺跡36個の「玦状耳飾」を集成しているが、在地性の強い九州の土器型式には伴わず九州以外の地域との交流を示す遺物の一つと考えられる。九州の場合、アカホヤ火山灰降灰以後の轟B式土器以降の型式に伴い、北陸を中心とした「玦状耳飾」の先進地域には一歩遅れて盛行したとした。水ノ江は、ただ一例、鹿児島県鹿屋市打馬平原遺跡にアカホヤ火山灰層直下に出土例があるとしているが、これは報告書では垂飾品とされており、形態も「玦状耳飾」の可能性は薄く、出土層位も在地系土器の平椀式土器や塞ノ神式土器に伴っている（瀬戸口 1988）。本例を除外すると水ノ江も述べるとおり、アカホヤ火山灰降灰後、「玦状耳飾」は轟式土器に伴って九州に到来したと、当時は考えていた。

3 九州地方の二つの耳飾りの出土例

第15回九州縄文研究会は、「九州の縄文時代装身具」をテーマとして、2005年2月11日・12日の両日に、沖縄県立埋蔵文化財センターで実施された。その装身具の資料集成の中から玦状耳飾と耳栓を抽出すると、九州の玦状耳飾は64遺跡78個体である。（九州縄文研究会 2005）。そのほかに、上田耕の香港での発表の文献によって11遺跡11個体が追加できる（上田 1998）。

玦状耳飾は（表1）、九州では75遺跡で89個体の出土となる。耳栓等の耳飾りは、24遺跡で73個体の出土となっている。玦状耳飾は、24年前の31遺跡が倍以上の75遺跡となっている。耳栓等の耳飾りは、12年前の3遺跡が8倍の24遺跡と急増したことになる。

後に詳しく分析するが、確実にアカホヤ火山灰下位から出土した玦状耳飾は、石の本遺跡（熊本県）、三角山1遺跡（鹿児島県）、永迫第2遺跡・下猪ノ原遺跡（宮崎県）の4遺跡例である。これらは、約6,400年前のアカホヤ火山灰の下位であり、縄文時代早期後半の中頃に位置することにする。

耳栓等は、北部九州の福岡県と佐賀県に前期以降のものが5遺跡5個体あり、九州島の中央部に空白を作り、南部九州の熊本県南部と宮崎県と鹿児島県に早期のものが19遺跡の68個体が出土している。つまり、耳栓等の耳飾りは、北部九州は日本列島の耳栓等の在り方と一致しており、南部九州の特異性を際ださせている。

4 最近の二つの耳飾りの研究と課題

最近、上田耕・廣田晶子は、「南九州の初源期の玦状耳飾」と題し、初源期の玦状耳飾の南九州の変遷やアカホヤ火山灰の下位に最近見られるようになった耳栓との関係について論じている（上田・廣田 2004）。

これによると、最近、明らかになったアカホヤ火山灰



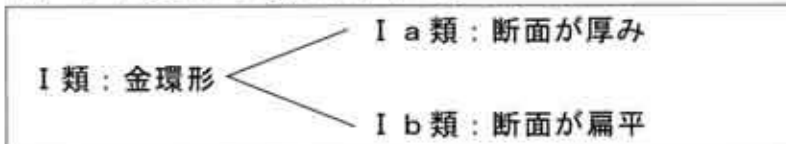
第2図 九州の耳栓等出土遺跡



第1図 九州の塊状耳飾出土遺跡

九州の「塊状耳飾」は、南九州のアカホヤ火山灰の下位からの出土例によって、研究の展開が大きく変わってきた。つまり、アカホヤ火山灰下位出土の塊状耳飾は始源期のタイプとすることができる。アカホヤ火山灰下位の塊状耳飾は、熊本県石の本遺跡例、宮崎県永迫第2遺跡例、同県下猪ノ原遺跡例、鹿児島県三角山I遺跡例の4例である。これらの4例を基本に九州出土の塊状耳飾を形態的に分析してみたい。

この4例は、いずれも中心孔は孔側辺部よりは若干小さいが、いわゆる金環形を呈するタイプである。アカホヤ火山灰下位から確実に出土した九州では最も古いタイプとして、便宜的にI類として位置づける。次に、4例の塊状耳飾の断面を観察すると、厚みのあるもの(a)と扁平なもの(b)の二種に分かれる。つまり、形態上は、I a類とI b類に分かれる。



アカホヤ火山灰下位出土例のうち、形態上においてI a類に属するものは、石の本遺跡例と三角山I遺跡例をあげることができる。そして、I b類に属するものは、永迫第2遺跡例と下猪ノ原遺跡例である。

九州島内出土の塊状耳飾を、形態上、これに準じて抽出すると、I a類には、福岡県広田遺跡例、同県貝元遺跡

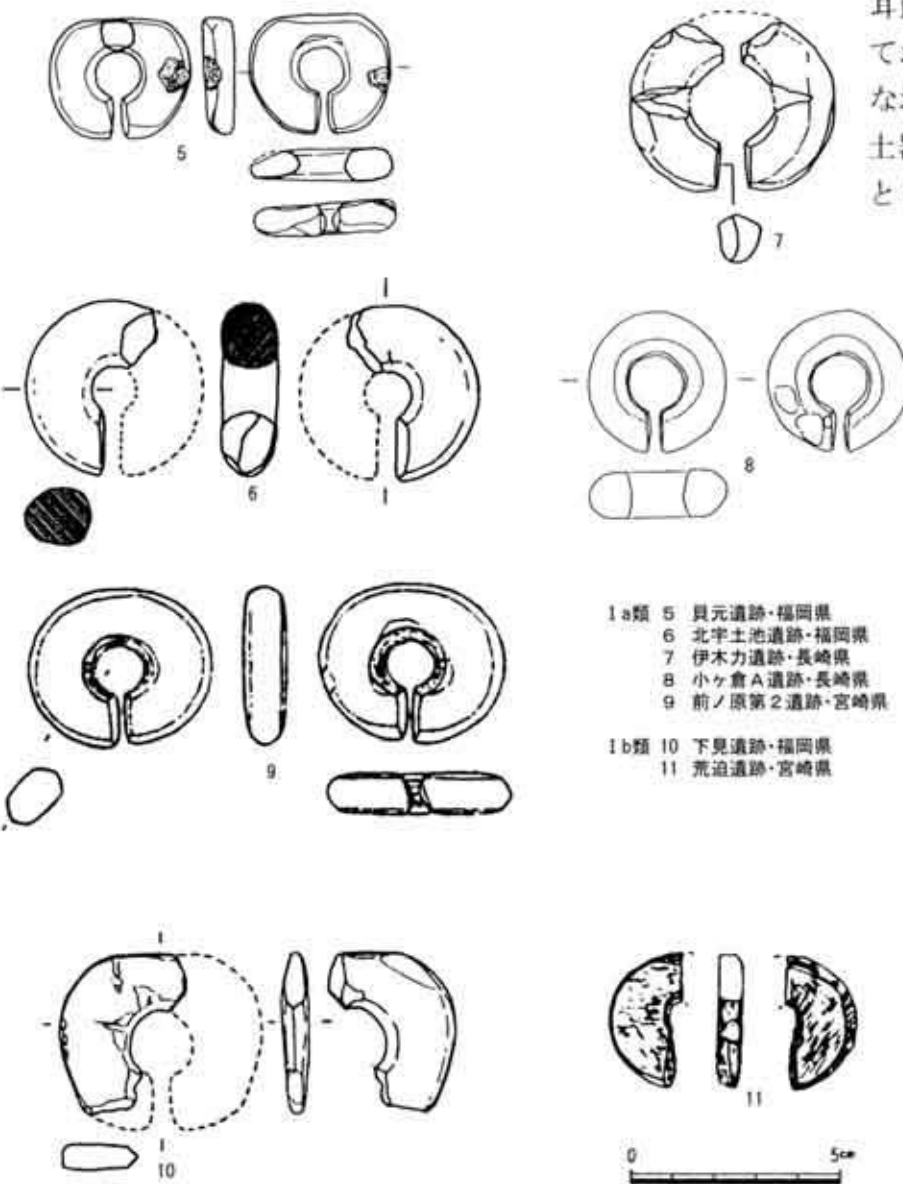
例、同県北宇土池遺跡例、長崎県伊木力遺跡例、同県小ヶ倉A遺跡例、宮崎県前原第2遺跡例など6例がある。I b類には、福岡県下見遺跡例、宮崎県荒迫遺跡例の2例を追加できる。つまり、九州島内のアカホヤ火山灰下位に相当する早期段階の塊状耳飾は、福岡県4例、長崎県2例、熊本県1例、宮崎県4例、鹿児島県1例の計12例が存在することになる。

そして、I類に続くII類として、中央孔が小さく、切目が長いタイプの鹿児島県上焼田遺跡例、同県西之園遺跡例などをあげることができる。このタイプは、アカホヤ火山灰上位の出土となる。

また、藤田富士夫の北陸地方の塊状耳飾の編年に従うと、中心孔が孔側辺部の幅より大きく、切目先端が細くなるタイプをこのI類の前に位置づけているが、鹿児島県下猪ノ原遺跡の採集例はこれに類似し、意外に古い可能性がある(藤田1998)。

以上のことから、塊状耳飾は、早期の後半の中頃(アカホヤ火山灰降灰前)に北部九州から、強いて述べれば西海岸沿いに南部九州へ伝播したことが考えられる。

次に、九州の耳栓は、3で述べたように、北部九州の福岡県3例、佐賀県2例の前期以降のものが5遺跡あり、九州島の中央部に空白を作り、南部九州の熊本県南部4例、宮崎県5例、鹿児島県10例の早期に該当するものが19遺跡の68個体が出土している。つまり、耳栓等の耳飾は、北部九州は日本列島の耳栓等の在り方と一致しており、南部九州の特異性・先進性を際ださせている。なお、熊本県柳貝塚の3個体は、早期に該当する右京西式土器(轟A式土器あるいは轟1式土器と呼ぶ人もいる)とともに採取されているが二次資料であることを記しておく。



第5図 九州の始源期(早期)の塊状耳飾

【引用文献】

前川威洋 1969「九州縄文後期の装身具について」『九州考古学』36・37
 上田 耕 1981「九州の塊状耳飾について」『鹿児島考古』第15号
 設楽博己 1983「縄文人の精神文化—土製耳飾り—」『縄文文化の研究』9
 原田昌幸 1988「縄文人の装い—耳栓・塊状耳飾—」『縄文人の道具』『古代史復元』3 講談社
 瀬戸口望 1988「打馬平原遺跡の出土資料」『鹿児島考古』第22号
 水ノ江和同 1992「九州の塊状耳飾」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV
 新東晃一 1993「縄文時代の二つの耳飾り」『南九州縄文通信』No.7 南九州縄文研究会
 上田 耕 1998「九州発見の塊状耳飾」『東亜玉器』
 藤田富士夫 1998「日本列島の塊状耳飾の始源に関する試論」『東亜玉器』
 上田耕・廣田晶子 2004「南九州の初期の塊状耳飾」『環日本海の玉文化の始源と展開』日本海学推進機構委託研究事業
 九州縄文研究会 2005『九州の縄文時代装身具』第15回九州縄文研究会沖縄大会

表1九州の球状耳飾出土一覧

【福岡県】

番	遺跡名	所在地	材質	サイズ	時期	備考	文献
1	仲ノ島4号周穴	宗像郡大島村神ノ島	滑石?	長2.4以上×約3.0	前~中期		1
2	約山遺跡	宗像市玄海町大字江口	不明	長2.6×幅1.0×厚0.4	不明	表面採集	2
3	新垣貝塚	鞍手郡鞍手町大字新垣	大理石	長4.1×幅2.6×厚0.8	前~中期		3
4	中村石丸遺跡	豊前市大字中村字石丸	蛇紋岩	長3.6×幅2.8×厚0.3	後期後葉	三方田式	4
5	貝元遺跡	筑紫野市大字志賀字へ北ノ木		長2.9以上×幅3.4×厚0.8	不明		5
6	大牟田志埴	福岡市南区柏原	不明				6
7	古田遺跡	糸島郡二丈町大字吉井字広田	蛇紋岩?	長2.以上×幅1.4×厚0.6	後期末		7
8	中瀬川所沢遺跡	大野城市大字瓦田	滑石?	長3.8×幅元幅4.8×厚0.9	不明	表面採集	8
9	法勝原遺跡	浮羽郡吉井町大字瀬永字法勝原		長4.5×幅3.0	不明	表面採集	9
10	北宇土池遺跡	久留米市藤山町字龜の甲	滑石	長4.2×幅3.4×厚1.4	不明	表面採集	10
11	下見遺跡	久留米市東合川町字下見	結晶片岩	長4.0×幅3.1×厚0.6	不明	有孔円盤?	11

【佐賀県】

番	遺跡名	所在地	材質	サイズ	時期	備考	文献
12	磯場ヶ谷遺跡	神埼郡東唐橋村三津	滑石	長約5cm	前期	儀式・管埋式	12
13	中小路遺跡	多久市南多久町字多久	滑石	長4.7×幅2.4×厚0.5	不明	再引用	13

【長崎県】

番	遺跡名	所在地	材質	サイズ	時期	備考	文献
14	起神丘遺跡	松浦市星屋町					14
15	下本山岩塚	佐世保市下本山町	貝				15
16	門前遺跡	佐世保市愛宕町・中里町	分折中		前期		16
17	根比呂高遺跡	東彼杵郡佐佐木町本郷		扁平楕円		採集	17
18	黒丸遺跡	大村市黒丸町	不明	長7.1×幅5.4×厚1.3	不明		18
19	伊木力遺跡	諫早市多良見町船津原	蛇紋岩	長4.1×幅2.2×厚1.1	前期	管埋式	19
20	小倉入遺跡	南高来郡高見町多比良	蛇紋岩		不明	表面採集	20
21	首花台遺跡	南高来郡高見町多比良	砂岩	扁平楕円			21
			曹長石?		前期	管埋式	
			緑色片岩		不明	表面採集	
			緑色片岩		中期	並木式	
22	野首遺跡	北松浦郡小値賀町野崎字西平	蛇紋岩		前・中期	管埋式・春日式	22
			石灰岩?		前・中・後葉		
			石灰岩?		前・中期		
23	宮下貝塚	五島市富江町松尾郷	蛇紋岩		後期	管埋式・並木式	23

【熊本県】

番	遺跡名	所在地	材質	サイズ	時期	備考	文献
24	松ノ木遺跡	上益城郡矢部町					24
25	新南田遺跡群	熊本市新南田2丁目					25
26	石の本遺跡群	熊本市平山	硬玉?	長3.41×幅3.7×厚0.9	早期後~前期		26
27	黒田裏遺跡	菊池郡大津町大字黒田裏					27
28	阿蘇貝塚	下益城郡城崎町阿蘇東原					28
29	曾根貝塚	宇土市岩古巻北原	硬玉	直径0.5	前期	表採	29
30	轟貝塚	宇土市宮の庄原屋敷					30
31	別府遺跡	球磨郡須恵村字別府					31
32	神松遺跡	球磨郡須恵村字神松	蛇紋岩		早期?		32
33	村山遺跡	人吉市村山					33
34	八崎遺跡	人吉市永町八崎					34
35	東方遺跡	球磨郡高野町東方					35

【大分県】

番	遺跡名	所在地	材質	サイズ	時期	備考	文献
36	石原貝塚	宇佐市青森字石原	石灰岩	長4.9×幅2.2×厚0.3	後期(編織式)		36
37	土野遺跡	豊後高田市土野字アウセ	硬玉	長4.9×幅2.4×厚0.7	後期(編織式)		37

表2九州の耳飾(土製・石製)出土一覧

【福岡県】

番	遺跡名	所在地	材質	サイズ	時期	備考	文献
1	勝田遺跡C地点	北九州市小倉南区大字勝田	土製	長1.5×径2.25	後期中葉		1
2	山鹿貝塚	遠賀郡芦屋町大字山鹿	土製	長3.3×径3.9		表面採集	2
3	曲り田遺跡	糸島郡二丈町大字石崎字曲り田	土製	長1.7以上×径元径2.0	晩期末	夜白式	3
3	遺跡			3個体			

【佐賀県】

番	遺跡名	所在地	材質	サイズ	時期	備考	文献
4	粟津遺跡	唐津市粟津	土製	長4.8×幅2.2~3.5	前~中期	輪板形	4
5	中尾ニツ枝遺跡	唐津市大良中尾字ニツ枝	土製	長3.6×幅2.4~3.3	前末~早期前半	輪板形	5
2	遺跡			2個体			

【熊本県】

番	遺跡名	所在地	材質	サイズ	時期	備考	文献
6	御貝塚	天草郡大矢野町中柳	土製		早期末~前期	表採	6
			土製		早期末~前期	表採	
			土製		早期末~前期	表採	
7	灰塚遺跡	球磨郡あさぎり町深田	土製	長4.4×幅5.1×厚2.7	早期		7
			土製	長4.7×幅6.0×厚2.1	早期		
			土製	長5.0×幅7.9×厚2.0	早期		
			土製	長2.9×幅5.2×厚0.8	早期		
			土製	長6.5×幅7.0	早期		
8	白鳥平A遺跡	人吉市赤池水無町立山	土製	復元直径8.0	早期		8
			土製	外径径7.5×内径径3.4	早期		
9	白鳥平B遺跡	人吉市赤池水無町立山	土製	外径径7.0×内径径3.0	早期		9
			土製	内径径4.2	早期		
4	遺跡			13個体			

【宮崎県】

番	遺跡名	所在地	材質	サイズ	時期	備考	文献
10	下瀬ノ原遺跡	宮崎県清武町大字船引	土製	上部径6×下部径7×高3.2	早期後半	丹塗り	10
			土製	上部径5.4×下部径7.4×高3.3	早期後半	丹塗り	
11	坂元遺跡	宮崎県清武町大字船引字坂元	土製	上部径5.4	早期	丹塗り	11
12	白々野第2・第3	宮崎市大字橋江字時雨原	土製	長7.9×厚2.8	早期		12
			土製	上部径6.1×下部径5.5×高4.2	早期		
			土製	上部径5.8×下部径4.8×高3.6	早期		
13	上瀬ノ原遺跡1	宮崎県清武町大字船引	土製	上部径7×下部径5.8×高3.6	早期		13
			土製	上部径6×下部径5.6×高4.1	早期		
			土製	上部径5.6	早期		
			土製	上部径6.8×下部径6.1×高2.9	早期		
			土製	上部径5.8	早期		
14	須田木遺跡	宮崎県清武町大字加納字須田木	土製	上部径9.6	早期		14
5	遺跡			12個体			

【鹿児島県】

番	遺跡名	所在地	材質	サイズ	時期	備考	文献
15	石打遺跡	鹿児島市松尾町西字石打	土製	径約6.0 厚1.3 孔径約1.6	早期後半	半穴	15
			土製	径6.05×高3.6 孔径2.85	早期後半	赤色顔料	
			土製	径6.8×高4.5 孔径4.3	早期後半		
			土製	径7.2×高3.4 孔径3.6	早期後半		
			土製	表径7.8×厚1.7×重34.8	早期後半		
			土製	表径5.9×厚2.6×重52.2	早期後半		
			土製	表径11.9×厚2.2×重107.0	早期後半		
			土製	表径14.7×厚1.5×重31.3	早期後半		
			土製	表径6.8×厚2.2×重42.2	早期後半		
			土製	表径6.5×厚2.3×重13.4	早期後半		
			土製	表径7.0×厚1.8×重9.6	早期後半		

【表1 関連引用文献】

- 1 岡崎敬・小田富士雄ほか1971「神ノ島」『宗像大社神津宮祭祀遺跡』昭和45年度概報 宗像大社復興期成会
- 2 前川威洋・橋昌信1979「第2 縄文・弥生時代の調査」『宗像神ノ島』宗像大社復興期成会
- 3 中村修身1982「縄文時代大塚について」『地域相研究』11号
- 4 木村幾多郎1980『新延貝塚』鞍手町埋蔵文化財調査会
- 5 水ノ江和同1996「中村石丸」『一般国道推田道路関係埋蔵文化財調査報告書』8 福岡県教育委員会
- 6 中間研志1999「貝元遺跡Ⅱ」『福岡県埋蔵文化財調査報告書』
- 7 山崎純男1987「遺跡の位置と歴史的環境」『柏原遺跡群Ⅳ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第158集
- 8 小池史哲1980『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』福岡市教育委員会
- 9 林潤也2005「第1章 旧石器・縄文時代」『大野城市史通史編』1 大野城市史編集委員会
- 10 片岡宏二ほか1996「ムラとムラびと」『田主丸町史』第2巻
- 11 山下実1997「久留米市北宇土池採集の球状耳飾」『地域相研究』第25号
- 12 富永直樹1985「下見遺跡の調査(2)」『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書』第43集 久留米市教育委員会
- 13 七田忠志1934「佐賀県戦場ヶ谷出土弥生式有紋土器について」『史前学雑誌』6巻2号
- 14 徳富則久1986「中小路増富遺跡一佐賀県農業基盤整備事業に伴う文化財報告書」4『佐賀県文化財調査報告書』83集
- 15 長崎県立松浦高等学校郷土社会部1966『松浦考古』3号
- 16 麻生優1973『下本山岩陰』佐世保市教育委員会
- 17 荒井春房2004「長崎県文化財調査報告」11『長崎県文化財調査報告』第175集 長崎県教育委員会
- 18 山下実1996「長崎県佐賀町根比呂池採集の球状耳飾」『地域相研究』第24号
- 19 町田俊幸1996「黒丸遺跡Ⅰ」『長崎県文化財調査報告書』第127集 長崎県教育委員会
- 20 福田一志1997「伊木力遺跡」『長崎県文化財調査報告書』第134集 長崎県教育委員会
- 21 辻田直人・竹中哲朗2003「長崎県国見町における縄文時代草創期遺跡の調査」『西海考古』5
- 22 杉村幸一1988「百花台遺跡採集の石器資料について」『古文化談叢』第19号
- 23 塚原博2003「野首遺跡一野崎多目的ダム建設に伴う発掘調査」『小値賀町文化財調査報告』第17集 小値賀町教育委員会
- 24 賀川光夫1969「宮下遺跡発掘調査報告図録編」『長崎県埋蔵文化財調査報告書』第7集 長崎県教育委員会
- 25 賀川光夫1971「宮下遺跡発掘調査報告解説編」『長崎県埋蔵文化財調査報告書』第9集 長崎県教育委員会
- 26 川道博1998「宮下貝塚」『富江町文化財調査報告書』第1集 富江町教育委員会
- 27 島津義昭1983「硬玉製大珠および玉類」『日本歴史地区』原始・古代編 下
- 28 富田純一1998「第二章 第三節 貝塚の始まり」『新熊本市史』通史編第一巻 新熊本市史編纂委員会
- 29 池田朋生2001「石の本遺跡群Ⅲ」『熊本県文化財発掘調査報告書』第194集 熊本県教育委員会
- 30 中村幸弘2002「石の本遺跡群Ⅳ」『熊本県文化財発掘調査報告書』第205集 熊本県教育委員会
- 31 江本直他1988「曾畑」『熊本県文化財調査報告』第100集 熊本県教育委員会
- 32 水崎康広・古城文雄・木村元浩「堂園遺跡・中尾遺跡・別府遺跡」『熊本県文化財調査報告書』第159集 熊本県教育委員会
- 33 島津義昭・古城文雄1996「神松遺跡」『熊本県文化財調査報告書』第154集 熊本県教育委員会
- 34 坂詰秀一他1977「縄文時代の玉製品」『考古遺跡・遺跡地名表』
- 35 清水宗昭・坂本嘉弘1979「石原貝塚・西和田貝塚」宇佐市教育委員会・大分県教育委員会
- 36 栗田勝弘・後藤一重1980「上野遺跡」豊後高田市文化財調査報告書 第1集 豊後高田市教育委員会
- 37 宮内克己他1983「粉洞穴。野鹿洞穴」『大分県史』先史編
- 38 岩尾松美・酒匂義明1964「速見郡山香町大字広瀬川原洞穴お調査」大分地方史 第34号 大分県地方史研究会
- 39 佐藤義敏1998「かわじ池遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(8) 大分県教育委員会
- 40 坂本嘉弘1990「直入地区発掘調査概報 Ⅲ」直入町教育委員会
- 41 2004年調査(原田昭一)
- 42 賀川光夫編1973「野鹿洞穴の研究一大分県直入郡萩町」別府大学考古学研究室報告3
- 43 東郷町教育委員会太川裕春氏のご教示いただいた。
- 44 上田耕・奥畑光博1997「宮崎県内の球状耳飾」『南九州縄文通信』No.11
- 45 廣田晶子2003「水迫第2遺跡」『高岡町埋蔵文化財調査報告書』第25集
- 46 秋成雅博・富田卓見2004「上猪ノ原遺跡3」『清武町県立埋蔵文化財調査報告書』第14集
- 47 森田浩史1998「宮崎県田野町で採集された球状耳飾」鹿児島考古第32号
- 48 東真一2000「内小野遺跡」『えびの市埋蔵文化財調査報告書』第25集
- 49 和田理啓・久木田浩子1998「荒迫遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』10集
- 50 池水寛治・長野真一他1979「荘貝塚」『出水市埋蔵文化財発掘調査報告書』(1)
- 51 中村耕治・牛ノ濱修1989「荘貝塚」『出水市埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)
- 52 上田耕1981「九州におけ球状耳飾」『鹿児島考古』第15号
- 53 寺師見國1943『鹿児島県下の縄文式土器分類及び出土遺跡表』
- 54 元田順子・牛ノ濱修2003「市ノ原遺跡(第一地点)」『鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書』(49)
- 55 鹿児島県立埋蔵文化財センター1994「球状耳飾り」『埋文だより』第6号
- 56 中村耕治・八木澤一郎2001「上野原遺跡(10地点)」『鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書』(28)
- 57 立神次郎・中村耕治1978「大隈地区埋蔵文化財分布調査外方」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(9)
- 58 瀬戸口望1984「柳井谷遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』(6)
- 59 埋蔵文化財調査室1997「鹿児島大学構内遺跡の出土品」『鹿児島大学学報』第432号
- 60 本田道輝・雨宮瑞生1989「球状耳飾の新例」『鹿児島史』第37号 鹿児島史学会
- 61 戸崎勝洋・青崎和憲他1978「阿多貝塚」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(1)
- 62 出口浩・池畑耕一他1977「指辺・横家・中之峯・上焼田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(5)
- 63 上東克彦・福永裕曉2000「梶ノ原遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(20)
- 64 池畑耕一・長野真一1978「西之薮遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(8)
- 65 上田耕・雨宮瑞生2003「南一ノ谷遺跡」『知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書』(11)
- 66 河口貞徳1972「鹿児島県草垣上ノ島の遺跡」『考古学ジャーナル』No.66
- 67 河野治雄1972「草垣島出土の遺物について」『鹿児島考古』第6号
- 68 藤崎光洋・中村和美「三角山Ⅰ遺跡 三角山遺跡群(3)」『鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書』(96)
- 69 上田耕1998「九州発見の球状耳飾」『東亜玉器』聴編

【表2 関連引用文献】

- 1 宇野慎敏1985「勝内遺跡(C地点)」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』41集
- 2 中村修身1994『山鹿貝塚・夏井ヶ浜貝塚収集資料』芦屋町教育委員会(6集)
- 3 橋口達也・中間研志1984「石崎曲り田遺跡Ⅱ」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』9集 福岡県教育委員会
- 4 中島直幸・田島龍太1982「菜畑遺跡」『唐津市文化財調査報告書』5集 佐賀市教育委員会
- 5 田島龍太1991「中尾ニツ枝遺跡(1)」『唐津市文化財調査報告書』47集
- 6 島津義昭・古城文雄1996「神松遺跡」『熊本県文化財調査報告書』第154集 熊本県教育委員会
- 7 山下義満2000「灰塚遺跡」『熊本県文化財調査報告書』第142集 熊本県教育委員会
- 8 宮坂孝宏1993「白鳥平A遺跡」『熊本県文化財調査報告書』第127集 熊本県教育委員会
- 9 宮坂孝宏1994「白鳥平B遺跡」『熊本県文化財調査報告書』第142集 熊本県教育委員会
- 10 井田篤・秋成雅博2005「下猪ノ原遺跡」『清武町県立埋蔵文化財調査報告書』第17集
- 11 井田篤・秋成雅博2005「板元遺跡」『清武町県立埋蔵文化財調査報告書』第15集
- 12 面高哲郎・日高広人2002「白ヶ野第2・第3遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』52集
- 13 井田篤・秋成雅博2002「上猪ノ原遺跡Ⅰ」『清武町県立埋蔵文化財調査報告書』第10集
- 14 秋成雅博・伊東但2004「須田木遺跡」『清武町県立埋蔵文化財調査報告書』第12集
- 15 盛岡尚孝・藤井義則1999「セツ谷遺跡・石打遺跡」『吉松町埋蔵文化財発掘調査報告書』(4)
- 16 長野真一・鮫島伸吾他2003「城ヶ尾遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(60)
- 17 中村耕治・八木澤一郎2001「上野原遺跡(10地点)」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(28)
- 18 児玉健一郎2002「出水平遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(43)
- 19 小村美義1992「下田遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』(22)
- 20 河口貞徳1985「鹿児島県石坂上遺跡」『探訪 縄文の遺跡 西日本編』有斐閣
- 21 上田耕・雨宮瑞生1997「西垂水(山麓)遺跡」『知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書』(8)
- 22 藤崎光洋他2004「三角山Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(63)
- 23 鹿児島県立埋蔵文化財センター2006.2「縄文人のアクセサリ」『埋文だより』No.40